

jdzb echo

未来への回帰、そしてさらなる跳躍を目指して

神余隆博(Dr.) 駐独日本国大使

皇太子殿下およびクリスティアン・ヴルフ大統領におかれては、10月1日に「日独交流150周年」の名誉総裁に就任されました。皇太子殿下は150周年に寄せられたお言葉の中で、「交流150周年というこの歴史的な年を記念し、日独両国で開催される事業を通じて相互理解を深め、両国民の間でさらに強い「絆」が生まれることを願ってやみません。」と述べられ、また、ヴルフ大統領は、150周年に寄せた挨拶の中で、日本人にはとりわけなじみのあるベートーベンの第九のシラーの詩を引用されて、『神々の美しき火花』が数多くの催しに降りそそぎ、日独両国の友好への情熱に火がともされることを願っています。あらゆる世代がともに担い、青少年が未来を活発に築いていくような友好が生まれるよう期待します。」と述べ、150周年交流事業

への大きな期待を表明されています。

ドイツでも日本でも150周年の行事が既に始まり盛り上がりを見せています。日本では、10月16日に東京横浜ドイツ学園において、コルネリア・ピーパー外務省国務大臣や伴野豊外務副大臣をはじめ多くの日独関係者の参加の下で、盛大な150周年オープニング・イベントが行なわれました。ドイツにおきましても既に今年の6月以降、150周年のさまざまなプレ・イベントが行なわれています。中でも、10月20日に行なわれたベルリン日独センター25周年記念におけるシュミット元首相による記念講演は圧巻でした。ただ、その翌日にロキ夫人が逝去されたことは、悲しみの極みであります。ここに改めてご冥福をお祈りします。来年1月にはベルリン、ミュンヘン、

エアフルト、デュッセルドルフで能公演が行なわれますが、この初日となる1月19日にベルリン「世界文化会館」において150周年のオープニングを祝うことになっています。

150年前の1860年秋、プロイセンからやってきたオイレンブルク伯爵の艦船が、修好通商条約締結に向け交渉を行なうために、当時の江戸湾に来航しました。翌1861年1月24日に日プロイセン修好通商条約が締結され、日本とドイツの外交関係が正式に始まりました。明治時代に入ると、岩倉使節団がアメリカや欧州を歴訪し、日本はドイツから法律や科学、芸術等の諸分野で実に多くの知識を導入しました。伊藤博文が大日本帝国憲法の起草にあたってプロイセン憲法を参考にしたことは有名



ヘルムート・シュミット祝賀講演会『日本、ドイツ、そして近隣諸国』(2010年10月20日、於ドイツ銀行ベルリン・ミッテ区)。講演を採録した小冊子をご希望の方は、ベルリン日独センターまでお問い合わせください。(写真提供: Drk Enters)

目次

巻頭寄稿文 日独交流150周年 神余隆博	1~2
インタビュー 『カフカ開国』	3
会議系事業報告 日独ソーラー・デーの紹介	4
人的交流事業報告 若手研究者招聘事業	5
その他の事業報告	6
2011年事業計画	7
ベルリン日独センター活動紹介	8

です。その後数十年にわたり、明治の日本から学問を志す多数の若者たち、医学や研究に携わる人々、陸海軍の士官候補の人々がドイツにおいて学問・研究に励みました。1880年代にドイツに留学した森鷗外や北里柴三郎もその一人です。

これまでの間、日独両国は、互いに対する敬意と親近の情を基礎に、相互に多くを学び、友好関係を育てて参りました。今日、ドイツと言えば、我々日本人にとって、勤勉で優秀な国民と優れた技術に支えられた経済・技術大国として、あるいはベートーベンやゲーテといった偉人を輩出した文化の国として、さらには豊かな森と自然に恵まれた美しい国として、大変親しみを覚える国の一つです。ドイツ・ビールや、ソーセージなど、豊かな食文化へのファンも多いことでしょう。さらに、ベルリンの壁崩壊を機に20年前に再統一を実現し、さまざまな困難に直面しながらも、繁栄と東西の「心の壁」の克服に成功しつつあるドイツ国民に対し、多くの日本人は尊敬の念を抱いています。

一方、ドイツにおいても、我が国は戦後、ドイツと同じく奇跡的な復興を遂げ、1968年以来42年の間世界第2位の経済大国として、あるいは歌舞伎や浮世絵に代表されるような豊かな伝統文化を誇る国として、また最近ではマンガ・アニメに代表されるポップカルチャーや、ドイツでもブームとなっている日本食の故郷として、親しみと敬意をもたれていると承知しております。また、我が国は近年ノーベル賞受賞者を輩出する科学技術大国として、ドイツはじめ欧米諸国にも少なからぬ影響を与えるに至っています。

こうした日独の150年にわたる長い交流の歴史は、先人たちがたゆまぬ交

流の努力を続けてきたことの結果であり、「日独交流150周年」は、感謝の念をもってこうした努力を振り返る良い機会です。そして同時に、急速に変貌する世界の中で、未来に向けて日独の協力や交流を深め、新たに跳躍していく契機でもあります。私たちは、両国の緊密な二国間関係、共通の価値と利害関心を基礎に、今後も、政治、経済、教育、学術、スポーツ、市民社会の交流を一層強化していきたいと考えています。

ドイツで予定されている主要行事も、1月の能公演や8月からの北斎展といった見逃せない伝統文化や5月の大規模なデュッセルドルフ日本週間などに加えて、日独の学術交流のあり方や日本と新連邦州との経済交流や投資促進をテーマとするシンポジウムの企画など、未来志向の行事も盛りだくさんです。また、日独の知的交流において主導的な役割を担うベルリン日独センターが、非常に積極的に種々の企画をしていますので、この150周年を機にぜひ訪問してみてください。

150周年は、さまざまなイベントを企画・運営し、あるいは支援して下さる独日協会をはじめとする多くの団体、個人の皆様に支えられて実現するものです。これら、日独交流150周年を支えて下さる全ての皆様に、心から感謝申し上げます。今後1年間を通じて、日独両国ではさまざまな記念イベントが開催されますが、是非、多くの皆様に積極的に参加いただくとともに、それぞれのお立場から未来の日独関係を築いていくのだというお気持ちで、ご協力いただければ幸いです。



ヘルムート・シュミット 祝賀講演会における神余隆博(Dr.) 駐独日本国大使 (写真提供: Dirk Enters)

『jdzb echo』読者の皆様

本年設立25周年を迎えたベルリン日独センターは、これを祝う数々の事業を開催しました。その最後を飾ったハイライトがヘルムート・シュミット祝賀講演会および若手ピアニストのモナ飛鳥オット氏のリサイタルでした。どちらの事業にも大勢の知己朋友をお迎えできましたことを嬉しく思います。

2010年はベルリン日独センターの記念すべき一年でしたが、来年は日独関係の記念すべき一年となります。というのも、2011年は日本とドイツの外交関係が正式に開始した150周年目にあたるからです。これを契機にベルリン日独センターは過去を振り返る事業を企画いたしました。もちろん日独関係をさらに促進・強化する未来指向の事業も予定しております。日本とドイツは共通の関心事や価値観を有するだけでなく、似たような問題や課題を抱えています。したがって、これからもベルリン日独センターが取り上げ、掘り下げるべきテーマに不足はないでしょう。そのためにも、引き続きパートナー機関のご協力をお願い申し上げます。なお、本紙7頁に来年度の事業一覧を掲載いたしましたので、ご参照くださいますようお願いいたします。

最後にベルリン日独センター所員一同を代表し、皆様方に明るい祝祭日と、2011年のご多幸をお祈りいたします。

フリデリケ・ボッセ (Dr. Friederike Bosse)
ベルリン日独センター事務総長

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙『jdzb echo』は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行: ベルリン日独センター (JDZB)
編集: ミハエル・ニーマン
E-Mail: mniemann@jdzb.de

本紙『jdzb echo』はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先:

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel.: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: <http://www.jdzb.de>

図書室の開室時間は月曜日と木曜日午前10時～午後4時、水曜日正午12時～午後6時です。貸し出しサービス実施中!

友の会連絡先: freundeskreis@jdzb.de



「日独交流150周年」ウェブサイト: <http://www.de.emb-japan.go.jp/dj2011/index.html>

2011年2月にベルリン日独センターで、多和田葉子書き下ろし舞台劇『カフカ開国』を上演します。出演はベルリンの劇団らせん館で、計6回の公演を予定しています。

原作者の多和田葉子氏は東京で生まれ、早稲田大学でロシア文学を専攻しました。初めてドイツを訪れたのは1979年、シベリア鉄道の旅です。1982年にハンブルクに移住し、ハンブルク大学でジークリット・ヴァイゲル教授の下で現代ドイツ文学を専攻、チューリッヒ大学で文学博士号を取得します。1986年にドイツ語による作品がモノグラフ『Japan-Lesebuch』(テュービンゲン、Konkursverlag 出版)に収録されて文壇デビュー、翌1987年に日独語の詩集『あなたのいるところだけ何も無い・Nur da wo du bist da ist nichts』が刊行されます。日本で初めて刊行された単行本は1992年の『三人関係』(講談社)です。以後、日本語とドイツ語による執筆活動を続け、日独で多数の賞を受賞しています。

『カフカ開国』公演に向けて、本紙は2005年に本拠をベルリンに移した多和田葉子氏にインタビューしました。

編集部:『カフカ開国』は先生の最新の戯曲ですが、タイトルの意味および内容(簡単なあらすじ)を教えてください。

多和田:これは、ドイツ語の「ウンゲツィーファー」という単語をめぐる劇と言っているかもしれませんが。カフカの『変身』ではみなさんご存じのように、主人公グレゴール・ザムザがこの「ウンゲツィーファー」に変身してしましますが、邦訳は「害虫」その他いろいろありますね。クルーグ語源辞典で調べてみると、この単語はもともと「不浄な動物」、おそらく「不浄なので、生け贄にふさわしくない動物」という意味であったろうと書かれています。変身してしまったグレゴールはもう仕事ができなくなる、あるいは仕事をしなくてもよくなるわけです。両親の借金を返すために働かなければならなかったはずが、変身してしまったからは不思議なことに、借金のことはもう問題にされず、結局は家族がグレゴールの妹の結婚に未来への希望をたくすことで終わっています。『カフカ開国』はこの謎に満ちたカフカの「変身」を芝居にしたものですが、同時に日本の開国に関する物語でもあり、「夜叉が池」が出てきて、泉鏡花自身も登場します。鏡花は、日本の近代化が始まって江戸時代の妖怪を忘れることなく、怪しい世界を言語の中にすくいとることに成功した作家だと思っています。

編集部:先生の文学創作活動において、カフカはどのような意義をもつのでしょうか。

多和田:カフカの文学では言語そのものの魔術性と超現実主義的な要素がお互いに作用しあっていて、ドイツ語文学の中では例外的な存在だと思います。カフカは中学生の時から好きでしたが、後にヴァルター・ベンヤミンのおかげで、再発見することができました。わたしは世界各国を旅してきましたが、カフカはいろいろな文化圏で若い人に読まれています。日本やアメリカだけでなく、中国やイスラム圏でも熱心なカフカの読者と出会うことができました。

編集部:先生は日本語とドイツ語で執筆活動を続けておられますが、最新作はどちらの言語で書かれましたか。また、その言語を選んだ理由も教えてください。

多和田:『カフカ開国』では、ある国で作られた作品をもう一つの国に輸出するのではなく、作り上げる過程で既に、わたしたちが生活し、稽古し、シュピーレンしている場所から学びたいと思いました。この場合、場所というのはドイツ語のことです。「シュピーレン」というドイツ語には「芝居を上演する」という意味もありますし、言葉遊びをする場合の「遊び」もシュピーレンですね。前者はらせん館の仕事、後者はわたしの仕事です。このお芝居には日本語の部分もありますが、その部分は意味が分からなくても、音として楽しめると思います。

編集部:劇団らせん館は、1997年から『サンチョパンサ』『舞台動物』『旅をする裸の眼』等の先生の作品を上演してきました。らせん館は、「諸文化の狭間において、言葉の可能性の限界を追求し、現代的な演劇形式を開発すること」を目指しています。先生も、日本語とドイツ語、また日本文化とドイツ文化の間をひんぱんに往来する人物と目されていらっしゃる。そういう意味で先生とらせん館は気性の似通う、親和力が作用する同士と言えるでしょうか。

多和田:わたしは魂がたくさんあるので、これからは魂の呼びあうたくさんのアーティストと出遭いたいと思っています。ただし、派閥や一族

を作る気はありません。らせん館は1992年からわたしの作品を舞台にのせ続け、他には例のない独自の美学を作り上げてきています。今の時代、母語の通じない場所で暮らしているアーティストや知識人はたくさんいます。外国語を舌にのせる感触は、時代を代表する感触と言っているのではないのでしょうか。外国語を話す時、穴があいていたり、折れていたり、割れていたり、壊れていたり、ゆがんでいたりする部分がありますが、そんなところにこそ、本当に知る価値のある事柄が見えてくると思うのです。

編集部:先生の創作活動は詩、エッセイ、散文、戯曲、放送劇と幅広く、ピアニストの高瀬アキさんと一緒にベルリン日独センターでデュオ・パフォーマンスの公演をされたこともあります。一番好きな創作ジャンルを特定することは可能でしょうか。そして、文学者として最も大きな影響を受けたのは、どのジャンルでしょうか。

多和田:戯曲を読むのは昔から好きで、シェイクスピア、チェーホフ、ギリシャ悲劇から始まって、クライスト、ビューヒナー、ハイナー・ミュラーなど読みました。でも詩や散文などを読んだり書いたりするのも戯曲と同じくらい好きです。どのテキストも自分に合った形式を見つける必要があります。だからいろいろなジャンルで創作するのです。

編集部:『カフカ開国』は、「日独交流150周年」の公式認定行事として上演されます。作品に、日独関係に関する言及もありますか。

多和田:長い鎖国が終わって、日本は長い間閉じていたささやかな扉を開きました。プロイセンは近代化のスピードが速かったので日本の近代化のお手本に選ばれました。でも近代化を猛スピードで行なうことは人間や文化にどのような影響を与えるのでしょうか。江戸時代のけけ物や幽霊たちは姿を消す暇がなかったので、生き残り、最新技術、アニメ、マンガの中に再登場します。日本はただただ遅れまいとして、近代化、軍事化、アジア隣国の植民地化、戦争、民主化、工業化の中を突っ走ってきました。今こそ足をとめて休息しながら、自分の国の歴史を批判的に振り返ってみる時が来たのではないかと思います。



多和田葉子氏(左から3人目)と劇団らせん館の団員(於ベルリン日独センター)

日独ソーラー・デーの紹介

津崎通正

新エネルギー・産業技術開発機構、新エネルギー部、太陽電池グループ

2010年10月5日、東京国際交流館にて、フラウンホーファー応用研究振興協会、フラウンホーファー太陽エネルギーシステム研究所(ISE)、ベルリン日独センター、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の主催、ドイツ連邦教育・研究省(BMBF)、ドイツ連邦環境・自然保護・原子炉安全省(BMU)、経済産業省の後援で「日独ソーラー・デー」が開催された。来年は、日本とドイツが修好通商条約を締結した150周年の節目の年であり、本事業は「日独交流150周年」のプレ・イベントとして開催された。参加者は約300名であった。会場の都合で多くの方の参加をお断りしなくてはならなかったのは申し訳なく、残念であった。

冒頭、ベルリン日独センター事務総長フリデーケ・ボッセ氏(Dr. Friederike Bosse)、NEDO理事長村田成二氏、フラウンホーファーISE所長アイケ＝R・ヴェーバー氏(Prof. Dr. Eicke R. Weber)から挨拶があった。会議はセッション1から4までの講演とディスカッション、ファイナルパネルの順に進められた。以下簡単に内容を紹介する。

セッション1：太陽エネルギー、再生可能エネルギーのための新しい政治的枠組み

ドイツ連邦環境・自然保護・原子炉安全省OEC D部門ハラルド・ナイツェル氏(Harald Neitzel)からドイツの再生可能エネルギー導入目標や再生可能エネルギー法改正、負担額等について概説があった。

経済産業省国際交流官小井沢氏から施策やR&Dについて発表があった。

セッション2：日独の太陽光発電(PV)市場、PV技術の現状と展望

SMAソーラーテクノロジー株式会社のパイエル＝パスカル・ウルボンCF O(Pierre-Pascal Urbon)から「ドイツのPV市場」と題して、需要地での消費、ハウス・エネルギーマネジメントシステム(HEMS)、ビルディング・エネルギーマネジメントシステム(BEMS)、モニタリングシステムが今後重要になり、インバータが重要な役割を果たすとの説明があった。SMAの会社概要、R&Dについても紹介があった。

資源総合システム代表取締役一木修氏から「日本のPV市場」と題して日本の市場と産

業の概説があった。

フラウンホーファーISEのヴェーバー所長が「ドイツのPV技術」と題して講演された。ISEの紹介があり、2009年から5600万ユーロの予算にて、PV、太陽熱、省エネ建築、水素等の研究開発を遂行中であるとのこと。

豊田工業大学教授山口真史氏が「日本のPV技術」と題してNEDOのプロジェクト(未来技術、革新、次世代高性能)および独立行政法人科学技術振興機構(JST)のソーラーエネルギーを用いたクリーンエネルギージェネレーションの概要を報告された。

セッション3：最新研究開発動向

NEDO新エネルギー部主任研究員山本将道氏から「日本のPVナショナルプロジェクト」としてNEDO概要とロードマップ「PV2030+」の紹介があった。

豊田工業大学准教授大下祥雄氏が「日本のSi太陽電池研究の最前線」としてシリコン単結晶、多結晶の低コスト化と高効率化の課題を講演された。また今後のNEDOプロジェクトを紹介された。

産業技術総合研究所(AIST)太陽光発電研究センターの近藤道雄センター長から「日本のCPVを含む太陽電池の評価技術開発」として太陽電池の室内測定および屋外測定結果について講演があった。またAISTのメガソーラーの屋外測定結果の紹介やAISTでの革新太陽電池開発について紹介があった。ライフタイムでの信頼性の評価の標準化が必要と強調された。

フラウンホーファーISE所長代理アンドレアス・ベット氏(Dr. Andreas Bett)が「高効率太陽電池および集光型太陽光発電」と題して主に高効率太陽電池の課題について概説された。変換効率約30パーセントのISEの多接合セル、FLATCON集光モジュールについて紹介された。

フラウンホーファー生産技術オートメーション研究所(IPA)超清浄技術・マイクロ生産部門のワード・ゴメル部門長(Dr. Udo Gommel)が「太陽光発電産業向けの品質主導型大量生産」と題して講演され、結晶系太陽電池に関する国家プロジェクトが紹介された。

フラウンホーファーISEエネルギー政

策部門ゲルハルト・シュトリー＝ヒップ部門長(Gerhard Stryi-Hipp)から「冷暖房用太陽熱技術」と題して太陽熱技術の市場や産業について解説があった。

セッション4：ソーラー・メガプロジェクト

ミュンヘン再保険会社気候センターのセンター長でデザートック事業イニシアチブ(Dii)創始者のエルンスト・ラオホ氏(Ernst Rauch)が「砂漠での太陽光発電——ビジョンを現実に」と題して欧州・中東・北アフリカ地域に再生可能エネルギーを導入するプロジェクトを遂行するために設立されたDii社について概説された。

NEDOSmartコミュニティ部主任研究員諸住哲氏から「NEDOのメガソーラー実証プロジェクト」と題してNEDOの事業である太田市、ニューメキシコ(ロスアラモス、アルバカーキ)のプロジェクトが紹介された。

ファイナルパネル：日独太陽エネルギー市場および共同研究開発の可能性

日独太陽エネルギー市場および共同研究開発の可能性と題し、NEDO新エネルギー部の和泉章部長を座長に、日本側から小井沢氏、山口氏、近藤氏、ドイツ側からナイツェル氏、ヴェーバー氏、ラオホ氏が参加し、パネルディスカッションが行なわれた。テーマは太陽電池市場の予測と技術動向と協力の可能性についてであった。太陽電池市場については、政府の役割の重要性、コスト低減達成後の支援策の必要性、人材育成などが議論された。技術動向と協力については、投資家など新しい形のパートナーシップ、さまざまなセクターの幅広い協力、また蓄電・リサイクルなどのシステム分野、標準化、研究開発の重点化などが討論された。

会場からも活発な意見があり、今後の日独の協力について意見交換を行なった有意義な一日であった。会議終了後、ドイツ連邦環境・自然保護・原子炉安全省主催の交流会が行なわれ、日本で唯一という日本産ドイツビールが振る舞われた。所用で会議に参加できなかったドイツ連邦教育・研究省のゲオルグ・シュッテ次官(Dr. Georg Schütte)のスピーチもあり、会議に出席した多くの方が参加した。

若手研究者招聘事業に参加して
三宅治良
東京ガス商品開発部技術推進チーム

写真：若手研究者招聘事業の2010年度日本団、著者は右から3人目



『環境技術の醸成は待ったなしの状況まで追い込まれた』

レベルの差こそあれ、世界中の共通見解として環境問題が認識されている。しかし、多くの人々は同時に経済・産業面での持続的な発展を求めており、この両立にドイツや日本のような技術先進国の担う役割は非常に重要になってきた。

このような状況下「e-mobility」という共通の環境研究テーマをもった研究者を招聘する本プログラムにより2010年の2月にドイツ研究者の日本訪問、同年9月に日本研究者のドイツ訪問が実現し、相手国滞在中にそれぞれの国の大学・研究機関・企業などを訪れ、相互理解を深めるとともに新たな人的ネットワークの構築を行なえた。本報告は日本からドイツに訪問した参加者として得た経験および感想を述べさせていただく。

まず、ドイツの研究事情には大きく2点の驚きがあった。一点目は蓄電池の基礎研究に向けた投資についてである。環境技術への投資は世界中で急速に進んでいるが、ドイツにおいては応用研究に加え基礎研究に多くの投資が及んでいる。このため、最新設備の研究環境が構築されており、基礎研究として複数の次世代蓄電池の研究が盛んに進められている。日本では民間主体で電気自動車の開発が進められており、ドイツに比べると応用研究に力点が置かれている。

二点目は公的資金を活用した共同研究が盛んなことである。日本においては各企業が独自に自主性の高い研究を指向することが多いが、ドイツではコストリスクを低減させつつ、情報を広く公開し、他の国や研究所との相互作用による研究の進展および成果を重視している。情報漏洩のリスクはあるものの、世界共通の関心事である環境技術の研究にはドイツ式が望

ましいのではないかと感じた。

また、国民性の相違点としては、ドイツと日本では時間の流れが異なっているように感じた。ドイツでは日曜日に閉店することが法律で定められ、エレベータに閉ボタンが無い。一方、日本では宗教の違いなどもあり、日曜の営業は店主の自由であり、コンビニはいつでも営業している。

さらに、オフィスが個々人に用意されており、個人主義の高さも違いとして認識される。おそらく管理が少ない代わりに成果が重視されているのであろう。

視点を変えて、街を見ると数都市に人口が集中する日本に比べて、ドイツでは多くの地方都市が存在し過集中していないためカーシェアリング、e-bikeなどが導入しやすいと感じた。また、地震の影響が、ドイツの建屋は石造りが多くアパート（日本で言う長屋）タイプの住居が発達している。このため、熱融通を行なうセントラルヒーティング方式も一般的であり、コジェネレーションの導入が容易だと感じた。次世代の自動車は電気自動車であり、燃料電池自動車はさらに次の世代の技術と認識されつつある中、定置用燃料電池には活躍の場がありそうだ。

日本との共通点を考えると、まじめで、勤勉な気質が共通点として挙げられる。時間に対する感覚も日本に近いものがあると感じた。ビジネス上の協力関係の構築には、このような感覚が共通していることが必須条件であり、日本とドイツは協同でなんらかの取り組みを行なう上で最も重要な基礎ができあがっていると考えられる。そういった意味からも、今後も本プログラムを通じて出会った人たちとの交流を一層大事にしていきたい。

研究開発の面で言うと、両国とも研究分野で一定の成果は上げるものの、産業面の落としてこみに際して他国企業に追い

つかれるという状況にあり、この解決方法を模索している点にも共通するものを感じた。具体的にはアーヘン工科大学にて電気自動車の量産工場建設のプロジェクトなど新たな社会実験を行なっており、日本において慶応義塾大学が発端となったリチウムイオン電池の量産会社であるエリーパワーなどの取り組みと共通するものが考えられる。

最後に本プログラムの感想として、12日間の旅は心情的には短く感じ、もっと滞在したいと思うものの肉体的にはかなりハードな日程である。参加者の専門性を絞り込んで招聘している面とタイトなスケジュールが合わさり、集中して有意義な情報収集が行なえる反面、体調管理など十分な注意が必要であった。今回の訪問に際して、多くの大学、研究所、企業から大変オープンかつホスピタリティの高い歓迎を受け大変感謝している。また、我々の要望をなるべく取り入れた日程調整や、バス移動を増やし肉体的な負担を軽減してくれるなど、多くの配慮をいただいたベルリン日独センターにも謝意を表したい。

繰り返しになるが、環境技術の発展にドイツと日本の担う役割は非常に重要であり、今回の訪独をきっかけに、協同研究などの取り組みを進展させていくことが肝要であると感じた。また、同時にこの有意義な事業が継続して実施されることを切に願いつつ終わりの挨拶に代えさせていただく。



写真左:フリードリヒ・エーベルト財団、ドイツ日本研究所、日本成年後見制度学会、毎日新聞、筑波大学の協力を得て東京で開催した日独シンポジウム『成年後見制度』(2010年9月29日～30日)



写真上:宮武喜久恵絵画展『壁と私』の開会式(2010年10月4日)において、清水陽一ベルリン日独センター副事務総長と歓談する宮武氏。ベルリンの壁が崩壊した翌1990年、壁に世界中のアーティストに作品を依頼し、イーストサイド・ギャラリーと命名する記念碑として残すことが企画された当時、唯一人日本から招聘されたアーティストが宮武喜久恵である。

写真下:第101回ダーレム音楽の夕べ&ベルリン日独センター25周年記念コンサート:モナ飛鳥オット『ピアノリサイタル』(2010年11月10日)ではモーツァルト、ショパン、シューベルト、リストの曲が演奏された。



写真上:宮田亮平講演会『ときめきを伝えるとき』(2010年11月10日、於在独日本国大使館)の冒頭で、習字パフォーマンスを披露する東京芸術大学学長の宮田亮平氏。氏は、ベルリン日独センター評議員でもある。

写真下:ヴェロニカ・シェーパス(Veronika Schäpers)創作アーティストブック展覧会『がさごそ』では、多和田葉子の近著『お好み焼き』も出展された。2010年10月14日の展覧会開会式で対談するシェーパスと多和田。



2010年11月12日および13日に、ベルリン日独センターを会場に日独フォーラム第19回合同会議を開催。本年度は新たなテーマとして、日独の対中国関係および次世代指導層の育成を取り上げた。

会議系事業

国際社会における日独の共同責任

日独シンポジウム『法制度移転』

協力機関: 独日法律家協会(ハンブルク)、ドイツ学術交流会(ボン)、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(ボン)、慶応大学
2011年4月13日～16日、東京開催

日独シンポジウム『経済金融危機後のアジア』

協力機関: ドイツ・アジア研究所(ハンブルク)
開催予定日: 2011年6月16日～17日

日独安全保障ワークショップ『核不拡散条約運用再検討会議一年後』

協力機関: ハインリッヒ・ベル財団(ベルリン)
開催予定日: 2011年夏

国際シンポジウム『ヨーロッパとロシアの関係』

協力機関: コンラート・アデナウア財団(ベルリン)
開催予定日: 未定、東京開催

天然資源、エネルギー、地球温暖化、環境

日独シンポジウム『持続可能なツーリズム』

協力機関: 有限会社バイエルン・デザイン、日本産業デザイン振興会(東京)
開催予定日: 2011年11月初頭、東京開催

日独会議『人工の自然地域——社会経済的変遷における生物多様性』

協力機関: 東京大学農学生命科学研究科、ギーゼン大学
開催予定日: 未定

少子高齢化社会

日独ワークショップ『長期介護』

協力機関: ドイツ連邦保健省(ベルリン)、厚生労働省(東京)
開催予定日: 2011年9月6日～7日

日独シンポジウム『成長見込みのある将来指向的産業構造』

協力機関: 富士通総合研究所(東京)
開催予定日: 未定
開催予定日: 2010年9月29日～30日、東京開催

学術振興を通じた社会発展

日独ワークショップ『ハイリスク研究』

協力機関: ドイツ研究振興協会(東京)
開催予定日: 2011年6月、東京開催

日独シンポジウム『日独学術交流の歴史と現状』

協力機関: ハレ・ヴィッテンベルク大学
開催予定日: 2011年夏

国家、企業、市民社会

日独会議『政治におけるリーダーシップ(統率力)およびプロフェッショナリズム(職業意識)』

協力機関: ベルリン自由大学、渋沢栄一記念財団(東京)、ポートランド国立大学
開催予定日: 2011年9月、東京開催

日独ワークショップ『幸福——文化による相違は存在するか』

協力機関: ドイツ日本研究所(東京)
開催予定日: 2011年11月21日～22日

諸文化の対話 「日独交流150周年」

『第5回日独韓奨学生セミナー』(第12回奨学生セミナー)

協力機関: ドイツ学術交流会(ボン)
開催予定日: 2011年5月23日～24日

パネルディスカッション『ベルリンの文化機関紹介』

協力機関: 東京ドイツ文化センター、芸術文化祭 YOU ARE HERE: BERLIN TOKYO(東京)
開催予定日: 2011年9月または10月、東京開催

国際フォーラム『縄文時代の現象とユーラシアの新石器時代』

協力機関: ドイツ考古学研究所(ベルリン)、函館市埋蔵文化財事業団
開催予定日: 2011年10月28日～30日、函館開催

専門家ラウンドテーブル『日独のデジタルメモリー』

協力機関: ボン大学、ブリュクナー & ブリュクナー社(ベルリン)
開催予定日: 2011年下半年

日独シンポジウム『相手国のメディアにみる日独のイメージ』

協力機関: ロバート・ボッシュ財団(シュトゥットガルト)、経済広報センター(東京)
開催予定日: 2011年秋、東京開催

文化事業

コンサート

ダーレム音楽の夕べ

『新年コンサート』
2011年1月14日、19時30分開演

演劇

金春座ベルリン公演『船弁慶』

2011年1月19日、20時開演

金春座ベルリン公演『葵上』

2011年1月20日、20時開演

会場: ベルリン世界文化会館

チケット販売: www.hkw.de/komparu

劇団らせん館『カフカ開国』

2011年2月9日、10日、11日、16日、17日、18日

展覧会

オーラフ・ダールハウスおよび中原一樹による二人展『木と銅』

展示期間: 2011年2月11日まで

『山口憲能装束展』

会場: 東洋美術博物館(ベルリン)
開会式: 2011年1月18日

講演

山口憲講演会『能装束』

会場: 東洋美術博物館(ベルリン)
日時: 2011年1月28日、19時30分開演

人的交流事業

- ・若手研究者招聘事業
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム
『日独青少年指導者セミナー』
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・日独高校生交流『たけのこプログラム』

各プログラムの詳細は『<http://www.jdzb.de>』
->人的交流事業』

展覧会の観覧時間:

月曜日～木曜日10時～17時
金曜日10時～15時30分

会場についてほかに記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。
詳しくは <http://www.jdzb.de> -> 個別事業

**写真左**

アンゲラ・メルケル連邦首相が訪日した際、第2回ヤングリーダーズ・フォーラムの参加者と東京で会談(写真提供:ドイツ連邦政府、Kugler)

写真右下

「日本におけるドイツ2005/2006」の学術・科学の部の開幕イベントで、参加者に挨拶をするアンゲリカ・フィーツ(Angelika Viets)ベルリン日独センター事務総長(2005年4月9日、於東京)

**写真左上**

2005年10月14日から16日開催の日独フォーラム第14回合同会議参加委員による小泉首相表敬訪問(2005年10月14日、於総理府、写真提供:総理府)

写真左

ヨーク・ガイスマー(Jörg Geismar)個展『水族館』(2009年10月9日～2010年1月15日)の中の光管インスタレーション「Small Fishes, big Fishes(小さなサカナ、大きなサカナ)」は、雪の降り積もる庭園で道行く人々の目を惹き付けた。



ベルリン日独センター指導層(2010年12月時):久米邦貞総裁(2003年就任、元駐独大使)、マティアス・ナス副総裁(2003年就任、『DIE ZEIT』主席国際特派員)、フリデリーケ・ボッセ事務総長(Dr. Friederike Bosse、2006年就任)、清水陽一副事務総長(2009年就任)